



焦尾琴

舟船の記

一日琴月亭の舟に乗じて二挺の舟の
時をちかくけりしをさるる舟をよれ
念のさよりあきなりも何れに吉く
き氣をとりては徒らに揚墨くとも
かろよ落安樂の果に繁しては困り
と明りすたをうらむ人の限あるを
や心を志し屈せるものへはありし

なま南。大橋をへて上^三まつちよのめると
今戸の橋よこお入^一瞬のるよ方里の
思ひをめぐりし^し箭よりもとく^く翔ゆめ
うろくいさみある色を帆子あけて数
十艘こおのまゐるよ遠く^くも有^有笹の
柴をおちし^しなるに^にゆる^{ゆる}や^や減^減
ゆる^{ゆる}船^船に火^火繩^繩く^くゆ^ゆしてほ^ほち^ちま^ま
え^えち^ちあ^あて^てい^いみ^みー^ーと^とれ

其引

川上ハ柳^らむ^めあり 百^百子^子より 其^其角^角
あ^あ上^上ハ^ハ人^人音^音ち^ちめて^てほ^ほん^んか^か 百^百里^里
大^大橋^橋や^や火^火煙^煙を^をれ^れみ^みニ^ニ心^心 江^江墓^墓
一^一手^手爰^爰油^油の^の物^物し^しむ^むめ 柳^柳 午^午寂^寂
申^申す^すや^やあ^あま^まの^のめ^めの^のど^どの^の板^板外^外 甫^甫盛^盛
初^初ふ^ふや^や人^人看^看板^板乃^乃や^や一^一舟^舟 船^船叟^叟
漂^漂杭^杭や^や月^月ハ^ハ置^置より^り次^次才^才高^高 楓^楓子^子
白^白魚^魚や^やゆ^ゆか^かの^の火^火ハ^ハた^たり^りし^し 白^白柳^柳
蛙^蛙鳴^鳴唐^唐土^土を^を志^志く^くす^すニ^ニ挺^挺立^立 秋^秋美^美

元桃渚もはらりるるし洛ふのかみ桂
下を長安の渭水涇風を吹あううりて
奇絶漫とれ就賞なるよこもあひ
江南乃まのくを北極よはやら立のひ
らん派よりし寺の敷八十八みかの
あ女の樓臺ハ雨の存又雪の留かのみ
詩号の淵流をあつらう密くみ満く
このあかのも北極 龍の山作ぐにや
きく雲よ儘冬岫ウメルを吹あひあつは

えりは 芙蓉峯院よ入をてぬ目の霞
くくと高よむれくくをゆく何の虹と
いり 橋のあゝるみからうて辰平
あはも瑞必の現龍をくくえ

具引

無イ山の富士わ並みや秋の雪 其角
富士書れ碑すあすは秋の海 口遊
天川角のあゆみやうつあり 楓子
一刷毛ハ横すれり天の川 山崎

あすこやを綿ささく川簀垣 熊豊
橋よ躰をひくや世のあ 新喜
世の目ハ綱子とくく 重正 同
船尻の臍すくく 施餓鬼旗 竹苞
泊の系志やくも 一 其年
水門の内をよせんとて 序令
冷やりよ小鴨あつく 夕光 百里
末口ハせこの糠よあま 酒花
大橋乃下乃あくらや飛 文士

下三

堤はくいの人の交加ゆ 辛
田うす馬ありこれくきあつけ あり
あさくいの控くの石あはしく 放散り
風月よあせるあり松のつら竹を
志ふりてゆきぬる あり
あつし石原の進乃志 あり
人目おれ船の境子ハ小家 あり
きりてこめていさら川す あり
ふる皆この流子入

其引 所の産を寄て

卯あや何よとある海苔の味 其角

卯白の下級ひちて 蜆より 午寂

雨や篋子千海苔の行ゆり 文士

幕後小川の比や郭云 序令

推の末よ衣たむや村時雨 同

浮をの航仁組し 余情川 景帘

すあふ取ゆり 引と松浦浮 同

建評の形ひよをつ小菘り 白獅

幸清う芳の笛うきや 昔松 其角

祝の義八山吹の津や去るぬ分 同

はちきくふ裡もは出て十三夜 秋航

雷乃橋のうらやふ八手 百里

夕日や女中よ為す川を我 同

村あや川をへくくつー 甫盛

存くくらく成たり 土筆 堤亭

揚敷よ八袂天は海し 昏乃野 船叟

夕教よ衣をうけと賣名号 其角

河上の音楽あり

笙の脰是も帆の張る木立 午寂
おのの子の莖を波の菜螺也 同

こほるこの子をよせて

此碑てハ江を哀まぬ 量小其角

あらかまぬけの舟や文る月楓子

長江の心を流しやさるる名のあらか

るの流ハ林くりあてて待志つらあらか

わらり獨木為梁と唄け係付る也

阿へとはもハ果素をならうとゆる也

木陰も門のあけらり乃をさるるあらか

あせておののあらから花をのあらかげる

車をあらかへ鞅を送る

寮坊主のままのハ掛く 時多其角

下間や牛の歩前を版へりり百里

二の足はららあらから涼風呂楓子

ららの戸ハあらかりトて花火也 序令

あらからも四ッ下し 猿の舟 朝叟

涼風や通ひ小姓のかりめ立 景帝
水小屋の夕立是や東討者我 午寂
かよつらん四十の腹のりくき 朝叟
是や皆あをひくく下すのみ 其角
襪よハセつふきあや下むら 百里
不宿酒や宿荷よひ出に姥ら 其角

遊弘福寺

木屏下六尺四人唐めりは 同
木兔の布袋あむくやほの月 物叟

唐僧の寔生ふなるう猶うり 午寂
長陰や露鉄ハ僧のたつた 彩玄
唐音を身へるうてく踊外 紫お
回願緇深のものとめて至る所あるよ昔
今ある風情ともハ老の物るうはくし
びくく取くおすくをじわし此川
波子みやがぬるもあまの未を汲か
むへし賈島う句よ獨過潭底影とけ
与三子母子ゆとるや男を木のゆた

体も居れど御の上も小菟えりれ其の
くやふもかゝる寺しの體の色
菴の念舟玉ちりする火乃新
尾屋にけりあらしあへたでハ誰
しも夕のほし其の虎至の秋
はづやくとせ都人おあらし

其引

烏帽をかきんぬはは 都を 其角
青板をせるちきある月よ志 新豊

念佛のくももあらし柳か 波琴
松原や菊の裕て天しめ 立新
おりのの手水てくる西風外 提亭
味噌梅をききうらんや花房 百里
迷子の例先みらんや斤新 序令
宿下のくもあらし 妓王村 午寂
平舟ハ糸のりのあはれ 新立
宿みし杜氏もかよふ 移外 朝豊
あねや置^{ヨツテ}ちかるとは 波琴

先年月見のよほり

木女寺よしののきありりみり 其角

紫平の休息ふりも所後が 波麥

灯をあつく薄や波乃音 大町

浅茅原吟行 付 田家

頬すりやちもハむ人よ虫屋迄 其角

あれるや浅茅くあおる夜 同

立病のかく凡う池や蛙さく 景帝

ぬきてあると念のつてや斤鶴 新三

初ちや実のあるる高ハひるなり 新豊

芋虫を化生返治やあさちり 紫平

簞下灯火 入る病もよ 一邑

春雨のさうふよるのけあは 堤亭

玉砕や固炭をぬる茶の房 新三

雪の戸や雉う先こは茶のま檜 序令

追分や足袋て塚つく雪乃昏 其月

耕作の屏風の端や 梅柳 紫平

玉水や蜻蛉の白ひも 葉 余 白獅

総泉古

大さの田がとたつふ牛もろ序令
 沢原や千住の斤論ん知に朝叟
 浦ちりつ現子はうるこつあひ彩真
 刈麦や巴う白むりるる午寂
 化形や焼玉黍モロユシの骨をうり其角
 うすうす子珠れる筋や実洗ひ酉花
 白の目を女も切りはのすぬ序令
 ぎらうるの腥綱そをこれく盛お

帰棹吟

整髪を焼柳つまはし星の病其角
 例とくと鞠うらたそ人暑すお彩叟
 めを枯やるもあり世亦打山彩真
 追出を少秋そくを火に附鳳
 如房はてそちん持や昔の案昌川
 子舟と親子ふをまれふる時甫盛
 そぬけらる檣のやとりやぬり新波登
 棹のひり頬の故をばる海外午寂

川沙の氷波ゆきのさり所 紫衣
かかせまおろけ電のな藤外 酉花
砂りを摺舟底うせし家姑色 堤亭
はくろ子の筑波鳴出て星いれ 其角
亦波をも思ハぬ波のあまふ 新玄
幸俊の既市を志ハ一浪の上 午寂
水鷲とハ飛鳥川を酒を掛 波麥
漕つけて岸のたはかつ残る 紫衣
有ゆや波をさうの君と伯父 其角

舟中月とりのを 亡父東明
棹のるもろけひよあめあぬを
月あひより出さーやうあん
おのあきつ所はーあひを

醉狂 一三三五七言 三弄
三橋流三記^{一タノ}浅草指潮暮深川
出塩秋尾花波寄更行月歸去來^{ラタイナ}
今這^コ船頭

風雅をこのむ一子み六院がらぬの三を

魚考のあしをよけしめて自然の交を
あゆみよる二三子の膝をのべけしうけ
方丈の志つゝいも一時の業をさる中を
とらや無我巴をのきくまのいひとも
はくくけ川をさるおこ道逢のちる
促すテツチ十六の丁見も心世道ありあ
水茶屋のふんあくよ女よあつちり
もてあまれを落く酒を掃り去る分こ
雪あをけ二枚よけりて山陰の戴達を

向ん方を舟中み主人あつちり人猫をと
とりのせて蒲園川のあり院中み思く
ふゆりも一院をを藤相を李日亦
醒くを今の屈原かの大種れ苦こ
のこ怒れて分別の栖を志むるもそれ
あやせあつち巴無心あつち舟中の
るく悩み漂泊してけりなるいあり
一瞬の櫓をおさるて生後を劫破ス

晋子醉書

晋子一瞬行成而後ありわれ平
五十句を寄はるるに船中の
形容をよみて風物の楽送
それらの歌賞を求むるも
生涯にあらざるまよはれを
方丈をうらやむるはと五人
一巻の醉言ある方の白をん
すはより硯を仕まへり

指買ふ弱求てや流し魚
朝叟

そき揚枝みはつせの萩 具角
霞の比奈少くも月影なり 東潮
宿^{ヤトリ}鴉ハ 袖乃しゆみ 新真
梭の喜以て方小熟出と 序令
茶碗はくしをあたると 叟
一巻の男よあふ 中 晒 角
用心傘より口上りそよ 叟
ゆりこかに龍眼肉も琴のあ 真
出家子志ぬる服着ハ骨理 令

以灯を世々見れを交務飼
これハ世々れを浦島ハ 飯 角
働ハ辛クハかす寸相おあて 令
昼夜の損と秋のすてぬ 叟
よい月と本町の色枯れ 去
一様辛子あれを皮のよる 淵
小踏直を挾おろく 傀俣節 角
袖の重荷の簾をうれつく 令
白雨も春つけてはあふ世中よ 叟

然怨靈を殊太事あま 去
禪の口切ハけよみのくち 角
らうとく入よ 獨活も十挺 淵
蛭とり狐の確あつらと 叟
由良ノの命 法中乃 鼻 令
晨朝乃星よふにちる 為業確 去
あめとていせ 人をこの比 角
不玉の徳ハ安居の風子ノ家 令
摺紳あてくむ 隙も何と 叟

服息よおきてまはる枕箱 限
何とぬ篋て湯立てるまはる 角
夕月並佐を戒されて七騎落 角
薪キ枿ハカリをつるうら枯の房 令
菊の露野の元治のいとけ 叟
け雪隠もやくそくの縄 去
つよ流氷の麻五六牧 漱
琴アヒメよももくもる嫂アヒメ乃 柳 令
刃くう依持の玉水 心向を 角

下ナリ

あもしく鞘ハ 誰殿とるる 叟
唐へ上よあ葉よと玉のおけり 漱
家徳利乃つめハ 橙 角
子よ策ハ大念佛よこちり 去
あを流よ糸ぬいて東海 叟
霍乱の産路よ權乃きり 令
嘩子のやしは者すくもり 漱
既中きくは香かきしる人よぬの 叟
力かうらん唯落の 笹 去

浮世給よ軍ハんくりまひ必令
あり一うはを割札の誓角
融公^{キミ}二日三日の月冬蝶
河一ととくそく天人の海苔 玄

序

松下杖人

交遊のこころあるはむはむはむは
あまのく千古の神祇公未流細流を
わたりて犂牛の具角集を唱へて
焦尾琴と号は焼桐の朴目こ馬や
うりかゝる木の良材おりのあまて
えんしやがうく侍る立るのらもの
海老ありあゝの君のかりひのつるま
ひうれてあれは何とて燕の家よはまき
けろくとおとせむ御舟のせくれは

けく〜琴乃一曲はしをく〜を
きて〜れ〜たるこの色咲きあつむ
珠よとやうの能猫の化物ありて
子猫の昔姿とのす〜をわらふ
造物の筋をじあふの〜おこの色を
う〜て日あ〜を好む眼をひ〜ふ
赤〜中のつ〜を〜ふ形〜を
仕〜し〜りの袖をみる〜形
桂陰林泉窓雪の〜〜ここを
す〜何と〜と〜と

古麻恋句合

初巻

切戸〜尾骨見〜て玉うつ〜 秋航
足跡を〜つ〜猫や雪の中 其角

恋、

山雪の尾〜火をけせ長局 三弄

ひ〜りぬ

独り〜た〜三白猫 糸外

切〜

つ〜は〜あ〜思ひや梨の舌 楓子

うらみ

くはのそ乃恨之助や 男猫 周東

ふんりす、

あぐりし琴柱をさすやまの猫 直夜

愛恋

松山と袖丁はぬこのあらし 鹿岑

法、

夕やこやうちとんせてはうけ猫 三黒

梅うんや鼻何々する塀の笠 堤亭

恥、

面もせもあつあひぬこの額白 朝叟

老、

玉藻とや名のうてゆる古老猫 紫子

己う皆をこころむとけけ猫 秋色

幼、

簾木の百目をあふふ又けれ外 其角

新糸あうむのきの尿仕うち 酉花

寝枕、

竹や糸目ふくしてはゆくらう床 其雫

よれ枕移その爪中あふん衣 秋航

寄鏡、

うつくしや四乳のぬり鏡 吉御

舟猫やをのりすまのりえ 利合

寄鏡、

和れの手軽もうや坊主猫 柳子

寄蕙、

おもつけや咽もあふ尻尾猫 十流

寄占、

仇とくやちもひあやうて冬占 適三

灰うし同しぬこや七不思議 孫杏

短年、

いつも鼻はけりきて猫の手 銀杏

迷、

あり扱る刀いりて主察猫 馬黒

寄鏡、

白彩る猫の尻目や鏡と皿 川支

寄言、

うき思濃茶めいのむつけ猫 野徑

契来世、

男の皮を日一思ひり海老尾 視水

白地、

歌よはゆ敷のぬきやけら衣

酉花

餘光、

悪や世を極もはるし服の蚤

朝叟

女房を洗へる猫や華清宮

午寂

非紙、

吉板や尾は付く三輪の位進

甫盛

寄榜、

啖せて階子を虎踏らば山峰

下光

尋、

名物よかきくもや二世と 同洋

絶、

あかやわらわをいむ^二手 一 把 泊洲

祈、

うらりける人を初瀬やまゝ猫 波琴

悟、

祈られて早師おむや般若猫 新喜

倦、

巾の尾よはれる猫はつゝあけり 倚窓

寄寺、

柏木の柳もどれどあり猫 其角
古ちや赤手押を虎所お 波登

述懐、

寐もやして長く猫の日陰外 入松
墨際や思ひをてくろ鳥おこ 紫死

寄月、

白玉り向ふまをぬこ紙腫月 毎閑

寄日、

思ひのそ日子むく腹ハ布袋猫 序令

ほろく

あつ灰をかへる物乃やとんず 百里

昼

昼ハめて雫と並よや火傷猫 心水

夜、

煮こぐや猫の白波をすまひ 午寂

春の糸をいつるやとよこれ猫 堤亭

思他、

きろ猫を扱うろ落す猫の敷 沾徳

散くつを弄う方と祈俗おこ 其角

急病

こぶしカやゆるをカ西ノ病カ
蛇カ合傷カしカやカ昌川

移棄、

西カのカいカすカやカ座カ猫カ 白獅

寄床、

塗カ桶カをカにカ拵カみカてカきカきカ 口遊

寄垣、

魚カ串カをカ嗅カてカ西カのカやカ世カくカるカゆ 紫取

寄関、

包カまカれてカ鞆カおカどもカ虫カのカ窠 鈴豊

寄石、

石カ白カやカわカれてカ中カのカりカ猫カのカ情 扇拍

寄海、

うカきカまカいカひカ子カあカ丸カ簀カ巻カ猫 角枝

不定、

何カりカまカうカくカ厚カ弟カ猫カ下カ步カ級カづく 牛寂

疑、

腰カもカのカテカノカ辭カハカいカ是カ猫 同
花カのカ号カ於カ蝶カ子カ似カりカ展カ之カ助 其角

寄琴、

花の衣や猫の姿は八咫の役 野徑

寄鞠、

蹴るまやまもん流の猫の曲 里东

寄窓、

深窓の頬をぬるや秘菴猫 間指

寄几帳、

手几帳ハ三毛と片しぬぬ色紙 適三

寄屏風、

搔破る屏風うらじや妻の袷 揚葉

寄帯、

男猶とて七卷すや君の帯 甫盛

寄扇、

翫く身を好むおこの扇もひか 川友

寄池、

うらねむしといつ密へみ投ねこ 其栗

忘、

浦のしひや魁^{ツバクリ}あくるの忘艸 紫子

寄貴、

ぬき衣や繪子を切る位猫 乾叟

被_レ狂賊、

己_レ毛の着_レたるをや_レ恣の勝 其_レ宗

觸_レ物催、

陽_レ多_レよ_レて_レた_レる_レ世も固炭猫 堤亭

隔_レ夢他、

梯_レ互_レハ_レ及_レぬ_レ恣_レ座_レ既_レぬ_レ 朝叟

近隣、

京_レ町のぬ_レこ_レぬ_レい_レたり_レ物_レ屋_レ所 其角

寄塚、

恣_レ賑と猫_レよ_レせ_レる_レ横_三か_三ん 炭石

亂、

恣_レあ_レら_レる_レと_レり_レあ_レり_レあ_レる_レ 亀田猫 庸盛

表、

と_レ念_レぬ_レこ_レみ_レぬ_レを_レす_レる_レや_レ物_レ狂 新真

水、

立_レ猫_レや_レ店_レ猫_レの中_レの_レけ_レら_レぬ_レ 東源

進、

君_レや_レ陣_レし_レ面_レか_レう_レの_レぬ_レ合_レ総_レと 春船

寄_レ俗、

立_レけ_レる_レ今_レも_レ我_レ國_レの_レぬ_レ猫 白獅

下_レ木_レ之

忍切、

忍切を水映炮や先ぬこ 潘川

人傳、

蒲公やぬこ袋よあせりぬこ 波表

寄雪、

焼より伏見常盤より猫 家取

寄雲、

冬ぬぬい高万のやう 既痛猫 朝豊

寄松、

礼寺や松より六寸梅よりけ 序令

寄竹、

切られぬをのし須や梅より竹 其角

寄烟、

胸より扇尾の奈や海百山 于寂

跡木のもえて虎毛乃燈外 乍之

急立、

首玉の家名や位しやこの声 狹航

大梁に名ハ立しあう夕下りさう 到李

髷粧、

らじし猿ハお髪帽子猫 新玄

久契、

菜箸をくはして猫の連理、午寂、

失籠、

子をくはしたるのむくひ、因果猫、全阿

不割、

る下よあつぬまじ、田舎おこ、千琳

増、

毛を裾定家うつ、や二歳猫、百花

寄舞妓、

恋後の猫の狂言ゆめ、り、堤亭

旅り、

のりけよ、うけり、や猫の嫁、琴風

舟物、

いろのべよ、むひま物、し唐の種、景帝

寄螢、

海士なり、て、まろ、あま、や電猫、弁外

求、婿、

吉日を多うめる、よこ、や、揚、さめ、呪、白

肉れ、よ、あ、よ

かい、巻、つ、毛、を、好、せ、て、と、首、の、猫、周、東

夢の雨、

春風や瓦灯も夢の苗守居猫 塔亭

夢の巻、

焼物や泪よてもか蒸る猫 里東

人よりこそうのこをうらみ

耳あつてくちあもあすあかぬ 其角

唐祿のそよぶらさ

おのれ切あくく半の眼は 羽良

遊禅林

うきぬをゆりぬ猫や廿の州 三秀

潜上猫あぬこみかとりて曰

秋来前軍取^{ウケ}猫死^シ窺^ウ翁^{オウ}翻^レ盆^{ハシ}攪^{カク}夜眠^{ヤミ}

聞^ク道^{ミチ}狸^ヌ奴^ヌ將^{イラ}数^ス子^コ買^イ魚^{イシ}穿^ス柳^{ヤナギ}聘^ヒ街^{マチ}蟬^{セミ}

山谷カ猫ヲ乞フ詩也猫死テ大勢ノ胤

ドモ秋ノ夜スガラアレハルホドニ山谷ヲモ

アオツリテ盆皿鉢ヲカカヘレテ亥レクテ

子ラレスト也サレバ猫ヲモラヒテ畜^{カハ}ントナリ

此比キケバ家ノ後園ニ狸共子ヲイクツモ産

ケルホドニ猫カ居ルトシラバ一類ナレバ悦ビテ

魚ヲ買テ柳ノ枝ニサレ貫^ステ人ノ如クニ

礼聘^レテ祝義ヲ述ヌヘト也街^{カニ}蟬^トハ
猫ノ異名也花山院の所製^リも

爰^ニ吟^ムのやま^ニてハあ^ハく^ハく^ハ猫^ヲを

や^ミけ^ルとあ^ハと^ハ求^メる^ハと^ハと

巡^ルる^ハてち^トと^ハせ^ルる^ハは^ハ祝^ハ句^トハ

猫の妻^ノ竈^ノの^出ぬ^ルあり^ハと^ハ翁

天^ノあ^ハく^ハく^ハを^ハ猫^ノの^つり^ト尺

お^ハの^りら^とて^ハ只^トん^ト己^トと^ハ一^ト鉄

猫の妻^ノ夫婦^トい^フる^ハと^ハ宅

あ^ハく^ハく^ハそ^ハや^ハけ^ハと

詩仙の小序

三弄

陶^ノ韋^ノり^ハ藜^ノ桂^ノの^幽羨^ヲあ^ハる^ハ峯^ノ嶂^ノ乃^ハ
さ^ハる^ハ及^ハた^ハに^ハ李^ノ王^ノの^変化^ハハ^ハ天^ノ物^ト
厄^ノ神^トも^ハ恐^レれ^ハぬ^ハ大^ノ曆^ノ己^ノ序^ノの^くせ^ト
其^ノの^元祐^ノ自^ノ中^ノの^男だ^テ奉^ヲを^撫
は^リあ^ハり^ハと^ハ世^ノの^末の^りと^ハと^ハと^ハ
彼^ヲと^ハり^ハあ^ハつ^メて^ハ雪^ヲよ^スく^ハと^ハと^ハ
際^ノ一^ノ綺^ノ字^ノ繡^ノ言^ヲを^ハ切^リと^ハと^ハと^ハ
窓^ノは^ハ三^ノ計^ノ十^ノ策^ヲを^ハと^ハと^ハと^ハ
ら^ハち^ハく^ハを^ハ醉^ハと^ハと^ハと^ハと^ハと^ハ

枕のくれあおも風が破れて窓は
あふりのこころめくは梅の葉のうらみ

陶淵明

酒漉コンく
亦ハ巖中を雪の朝
午寂

杜子美

絲ひ絲子もよ
葱乃サキこお刻
其角

李太白

舟ハり番アハス
不上船ハあふ
全

岑参

南ハ蛮ハ移ハ中
星乃ち海影
寂

王維

西ノ方
波く浪あふん
関の月
日

山谷

其ニメカラをかむ馬ハ雷
角

陳后山

紅ハ葉ハもハくハく
給をり海晏寺
全

東坡

百ハちハ海ハこハらハ波
乃ハ聲
寂

司空曙

秋夜子
黄金

用ひつゝ

寂

許渾

この世間の甲子

角

梅聖俞

性や身を袋

入る猿

寂

韋應物

所化起つて亡命児

角

張籍

つゆ

衆あひ十九人中

全

趙嘏

二階乃笛

寂

斤我知

李群玉

擗蒲心冬一

日

志

皮日休

漱

花種

泥

角

宋之問

老花

全

人

白玉蟾

風中

寂

つる

蘇蓮

高名輪へかく匠を
のどと牛の鞍
寂

温庭筠

檣乃豆查ハ仲間キラスの表
角

李涉

湯もりの門前
獨看ル松ラ
全

黄知命

足を喰居レこれ多
黒石
寂

杜牧

按摩もり
貴人頭上ももり
日

陸龜蒙

塵禪乃影を
正じか
角

邵康節

年のされぬ
傾城
これと棘
全

花英夫人

かたい平
一箇男ヒナリあるは
寂

尼妙靜

却那のるを
あやもふ伏ん好好籠
同

王建

のどふ堂あり
小指こもも撲ツ
同

周賀

以雨^ニ 仄^ニをうら^ニほ^ニあ^ニ

角

井か^ニら

王元之

強^ニて狂^ニををつ^ニく^ニ

全

盧仝

鳴川ハ 鹿とぬ^ニあ^ニも^ニ

寂

相^ニあ^ニら^ニ

孟東野

羽^ニ二^ニ重^ニの^ニ密^ニし^ニみ^ニぬ^ニみ

角

賈島

か^ニま^ニく^ニの^ニ 是^ニ故^ニ郡^ニ

寂

千^ニ期^ニを^ニけ^ニり^ニ

韓退之

長^ニ屋^ニの^ニそ^ニり^ニみ

角

葉^ニの^ニ短^ニ葉^ニ

白居易

東^ニの^ニ船^ニ 悠^ニ々^ニ西^ニへ^ニ

寂

花^ニを^ニよ^ニみ

謝靈運

お^ニれ^ニて^ニあ^ニそ^ニみ^ニ春^ニ艸^ニの^ニ夢^ニ

角

右^ニの^ニ人^ニの^ニ白^ニを^ニと^ニら^ニる^ニは^ニ子^ニ名^ニを^ニ類^ニス

後叙

泮水之臨止カ竈井而已

存矣セリ嚮サキニ晉子之巢カシテ羅災ニ

而止ス妻見奴婢及雞犬

無急而已鹽米衣巾茶

酒之具皆為烏有而莫

一存焉漆園中所謂無
何有鄉焉者於晉子有
財言嘗知晉子之憲有
一箇古綿囊也其囊
耶江山風月可以納之
野馬塵埃可以攝之

天地之間髮辨乎身
目之物莫不敢於矣
晉子平生之工出人總在
于此囊中而已於此
晉子太息謂家婦曰
噫此囊之為烏有雖

白鹽米衣巾中我處于微
官則不餓不寒茶酒之
具亦不足惜焉幾惜於
消折家平生之主人家
婦乃起席曰叔之已而
今也奇奈之何探得

其囊中物略存于骨
者以之為幸耶不聞
茲邕之嬰相以得妙
音耶者子其之尔去而
後經是日將之家乃
巾笥反查之中者什

二三於之乎杖于花蹊
 船于晚涼車于楓林
 于雪之而固已志矣
 且夫人伐木丁丁黃鳥嚶嚶
 為晉子求友之於也
 鳴蛙之鼓吹為晉子知

曲也終能續其音
 而此書已成矣以蔡邕
 之相同其名者其可也

年寂散人書于

胡平書



日本橋五所

萬屋清兵衛版

淺倉屋久兵衛
再版
辻村五兵衛

寛保三亥仲冬

